

設楽発掘通信

No.85
令和6年
2月号

令和五年度成果報告会のご案内

設楽ダム関連の発掘調査が無事終了しました。今年度もめざましい調査成果を得ることができました。これも設楽町の皆さまや関係者の方々のご理解、ご協力をいただきましたおかげでございます。まずはお礼申し上げます。

さて、今年度の調査成果につきまして、三月九日（土曜日）に成果報告会『新設楽発見伝』を開催させていただきます。設楽町役場議場（田口字辻前十四）にて午後一時三十分から四時五十分まで、参加無料、申し込みは不要です。昨年度までと会場が異なります。お間違えのないよう、お願いいたします。

報告会では、今年度調査をしました上ヲロウ・下ヲロウ遺跡、万瀬遺跡、下延坂遺跡、根道外遺跡について報告をします。特に根道外遺跡は今回が初めての本格的な発掘調査となります。調査成果にご期待をいただければと思います。各遺跡の出土品も展示させていただきますので、実物を間近にご覧ください。さらに今回は、縄文時代や弥生時代に関する著書を多数ご執筆の設楽博己先生をお招きし、ご講演をいただきます。この機会に多くの皆さまにご参加をいただきますよう、ご案内申し上げます。

（鬼頭剛）

令和五年度設楽ダム関連発掘調査成果報告会 『新設楽発見伝10』 開催のご案内

日時 令和六年三月九日（土）午後一時三十分から

（開場午後一時から）

会場 設楽町議場（田口字辻前14）

※対面のみで開催で、オンラインでの配信予定はありません。

令和五年度に調査した遺跡をすべてご報告し、出土遺物の展示もいたします。

またあわせて、設楽博己先生（東京大学名誉教授）による特別講演も予定しています。

皆さまのご参加をお待ちしています。

令和五年度 設楽ダム関連発掘調査成果報告会
新設楽発見伝10
日時 令和6年3月9日（土）午後1時30分～4時50分
会場 設楽町議場（設楽町田口字辻前14）
参加無料 申し込み不要
写真：万瀬遺跡 近世墓調査の様子

今年度の発掘調査成果を一挙に報告、調査で出土した遺物も展示します。

●●●●●成果報告の内容●●●●●

令和五年度の設楽ダム関連の発掘調査について（尾崎綾亮：愛知県民文化局文化部 文化芸術課 文化財室）
上ヲロウ・下ヲロウ遺跡の発掘調査（荒木徳人：愛知県埋蔵文化財センター）
万瀬遺跡の発掘調査（荒木徳人：愛知県埋蔵文化財センター）
下延坂遺跡の発掘調査（川添和暁：愛知県埋蔵文化財センター）
根道外遺跡の発掘調査（川添和暁：愛知県埋蔵文化財センター）

特別講演 「設楽が語る、設楽の昔—縄文から弥生時代へ」（設楽博己：東京大学名誉教授）

※印刷資料の冊子自体をご希望の方は、3月11日（月）以降、設楽町教育委員会、国土交通省設楽ダム工事事務所、設楽町奥三河郷土館の各施設でも配布いたします。

主催
設楽町教育委員会 お問い合わせ・企画担当 愛知県埋蔵文化財センター調査課
国土交通省中部地方整備局設楽ダム工事事務所 鈴木正典・鬼頭 剛・川添和暁
電話 0567-67-4163
http://www.maibun.com/

（公財）愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター
愛知県民文化局文化部 文化芸術課 文化財室 動画サイトはこちらから
愛知県埋蔵文化財調査センター https://www.youtube.com/channel/UCIhy9RDYYQngH_MwJvkWpQ

ねみちそといせき 根道外遺跡の発掘調査

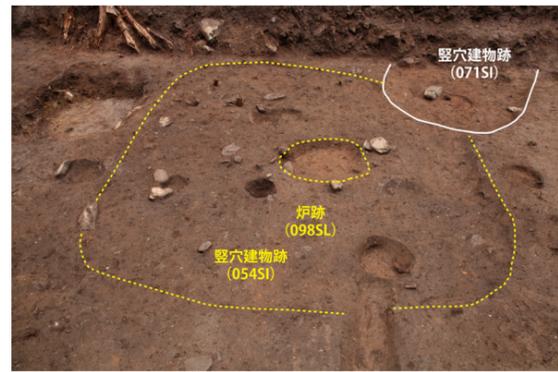
前号では縄文後期末から晩期を中心とした土器をはじめ、有溝石錘や石棒など様々な遺物が出土した赤褐色の堆積層についてご紹介しました。その後、調査が進むにつれ、この堆積層は土石流によって形成されたものであるという事が明らかとなり、この土石流堆積の下層から縄文および弥生時代の竪穴建物跡が複数見つかりました。ここでは前号の続きとして、土石流堆積より下層の調査成果についてご紹介します。

まず、調査区の北東側に位置する弥生時代の竪穴建物跡では地床炉(081SL・098SL)を有する建物跡が2基(053SI・054SI)重複する形で確認されました(写真①)。これらの建物跡からは弥生前期の条痕文土器が出土しており、活動時期に関してもこの頃であったと思われる。

一方、調査区の南側では縄文時代後期末の地床炉を有する竪穴建物跡が3基確認されました。その中の061SIに関しては地床炉内(123SL)から一部形状がわかる状態で縄文時代後期末の土器片が出土しました(写真③)。また、



写真① 竪穴建物跡 053SI・054SI・071SI
【弥生時代前期】(054SIは検出状況)



写真② 竪穴建物跡 054SI・071SI
【弥生時代前期】



写真③ 竪穴建物跡 061SI 炉跡 123SL 遺物出土状況
【縄文時代後期末】



写真④ 竪穴建物跡 064SI 炉跡 116SL 検出状況
【縄文時代後期末】

064SIでは、中央で地床炉跡が高まりのような状態で見つかりました。本来は床面が重複して上にも存在していたようです。

調査区中央西側に位置する竪穴建物跡(057SI)では縄文中期後半を主体とする土器が出土しており、全長五十センチ程の大型石棒も見つかりました(写真⑤)。この竪穴建物跡(057SI)の下にはさらに一基重複して石囲炉を有する竪穴建物跡(122SI)が見つかりました(写真⑧)。石囲炉跡の端部に副炉といわれる構造をもつもので、こちらの竪穴式建物跡からも縄文中期後半の土器が良好に出土しました(写真⑨)。

根道外遺跡の縄文時代・弥生時代の調査成果を、図1のようにまとめてみました。大きくは、①縄文時代中期後半(今から五千年前)【図中青文字】、②縄文時代後期末・晩期(今から約三千二〇〇年前)【図中黒文字】、③弥生前期(今から約二千二〇〇年前)【図中青文字】の三時期の活動痕跡が見つかりました。いずれも集落跡と考えられます。当時のヒトたちが、場当たりの居を構えたのではないようで、繰り返し同じ場所を利用したことが、よく分かる調査結果となりました。(川添和暁)



写真⑥ 竪穴建物跡 057SI 内大型石棒【縄文時代中期後半】



写真⑥ 土坑 079SK 土層断面【縄文時代晩期初頭】



写真⑧ 竪穴建物跡 122SI 床面検出2【縄文時代中期後半】



写真⑦ 竪穴建物跡 122SI 床面検出1【縄文時代中期後半】

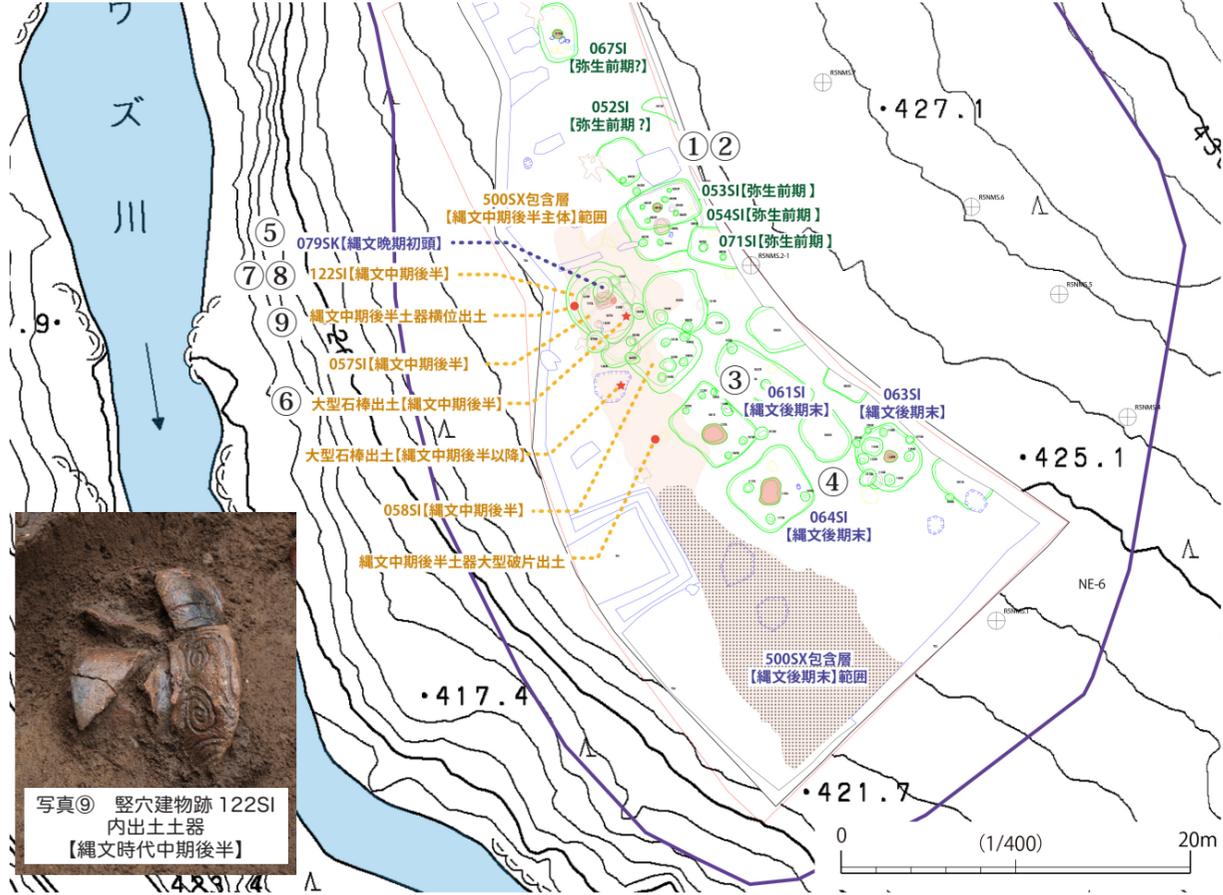


図1 根道外遺跡 縄文時代～弥生時代遺構位置図



写真⑨ 竪穴建物跡 122SI
内出土土器
【縄文時代中期後半】

万瀬遺跡で出土した小玉の素材について

今年度を実施された万瀬遺跡の発掘調査では調査区の西端に位置する墓坑(3018SZ)から副葬品として八十個以上の小玉が出土しました(図2)。今回出土した小玉の色調はほとんどが乳白色でしたが、オリブ色と黒色の小玉も数点出土しました(図3)。素材についてはオリブ色の小玉が半透明であったことから、出土した当初はガラス製品であると考えられていましたが、乳白色と黒色の小玉については目視では検討が付きませんでした。そこで、今回はこの3種類の小玉がどのような素材でできているのか把握するため、蛍光X線分析装置という機器を用いて調査しました(図4)。

蛍光X線分析とは対象物にX線を照射することで、物質は元素固有の蛍光X線のエネルギーが発生するため、このエネルギーを測定することにより、どのような元素が含まれているか明らかにする分析です。最近では考古資料や美術品などあらゆる文化財の分析事例が多くなりました。



図2 万瀬遺跡 3018SZ(土坑墓)



図3 万瀬遺跡 3018SZ から出土した小玉

蛍光X線分析の結果、乳白色とオリブ色の小玉はケイ素と鉛を主成分とする鉛ガラスであることがわかりました。一方、黒色の小玉は鉛がほとんど含まれておらず、ケイ素と鉄を主成分とし、カリウム及びカルシウムも含まれていました。現状、今回の分析結果から黒色の小玉に鉄が多く含まれているため、鉱物由来のものなのか、人工的に製造されたガラスなのか判断することが難しい結果となりました。その理由として、墓坑内には鉄製品も副葬されていたため、埋葬時から現在に至るまで小玉がその影響を受けていた可能性も考えられます。また、黒色の小玉にはカリウムとカルシウムが含まれていることからカリ石灰ガラスの可能性も考えられますが、江戸時代では鉛ガラスが主流であったため、今後はさらに分析を進め、ガラス製造技術や流通など当時の時代背景と照らし合わせながら調査を進めていく必要があります。

(荒木徳人)

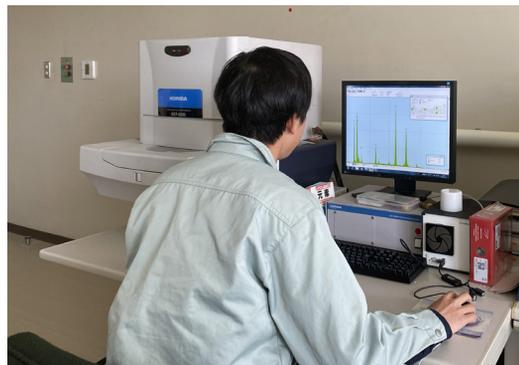


図4 蛍光X線分析装置

設楽発掘通信

No.85

令和6年2月号



編集・発行 公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

〒498-0007 愛知県富田市前ヶ須町野方8002の24

電話 (0567)67-4161【管理課】4163【調査課】

ホームページ <http://www.maibun.com>

Facebook <https://www.facebook.com/maibunatchi>

Twitter https://twitter.com/aichi_maibun

印刷・協力 株式会社二友組



あいち埋文